

ルイス・キャロル → キャロル、ルイス
 ルイス C・S Olive Staples Lewis 一八九八～一
 九六三 イギリスの英文学者で作家、神学者。北アイル
 ランドに生まれ、九歳で母を亡くした後、兄と架空の
 動物王国の物語をつくり出したり、読書にふけったり
 するが、少年期に北歐神話とマクドナルドの作品に出
 会ったことが、のちに壮大なファンタジーであるナル
 ニア物語のシリーズを生み出すきっかけとなった。
 中世とルネッサンス期を専攻し、オックスフォードと
 ケンブリッジの両大学で教えたルイスの余技ともいえ
 るナルニア物語は、著者によればはじめいくつかのイ
 メージが現れ、それをつないでいく形で生まれた。こ
 こでは人間や現実世界の生きもののほかにケンタウルス
 やフォーンなど神話や想像上の生きものが多彩に現
 れ、豊かな物語世界をつくっていくが、同時にシリー
 ズが全体として世界の創造から最後の審判に至るまで

ル

のキリスト教的世界観を背後にもつことも特徴的な
 とである。この物語群にはある種の暴力性もあり、た
 とえば、神沢利子はそれに反発することで彼女のファ
 ンタジー世界を拓いていった。第一作『ライオンと魔
 女』(一九五〇)は、衣装ダンスの中を通って雪の降るナ
 ルニア国に入ることではじまる。この国は白い魔女が
 支配しており、子どもたちはライオンのアスランの力
 を借りてこの国に春を呼ぶ。第二作『カスピアン王子』
 (五二)は、王子とともに「地上の海賊たち」に打ち勝つ
 話を、第三作『朝びらき丸、東の海へ』(五二)では、王
 子の「この世の終りの始まり」をめざす大航海が、第
 四作『銀の椅子』(五三)では王子の息子のリリアンの救
 出が、それぞれにテーマとなる。第五作のやや異色の
 『馬と少年』(五四)の後、『魔術師のおい』(五五)でこ
 の国の創世紀が、『最後の戦い』(五六)で最後の審判が
 語られる。なお、アスランはキリストであると同時に、
 「想像力そのもの」でもあろう。(谷本誠剛)

ルイス C・D Cecil Day Lewis 一九〇四～七二
 イギリスの詩人。子どものために二つの物語を書いて
 いる。『Dick Willoughby ティック・ウィロウビー』(一
 九三三)は、一六世紀を背景にした歴史小説。『オタバリ
 の少年探偵たち』(四八)は、フランス映画からヒントを
 得た物語で、少年たちの心の動きが生き生きと描かれ
 た名作とされている。『詩をよむ若き人々のために』(四

四)は、詩作上の体験を織り込んだ英詩の入門書。

(田中瑞枝)

ルイス ヒルダ Hilda Lewis 一八九六—一九七四

イギリスの歴史小説家。ロンドンに生まれ、ノッティンガムで暮らした。多くの大人向けの歴史小説の著者として知られるが、四冊ある子ども向けの本のうち、一九五二年以後の三冊は歴史小説である。最初の一冊である『飛ぶ船』(一九三九)だけは、登場する子どもたちが模型のバイキングの船で、時間をさかのぼって冒険の旅を経験する話で、ネズビットの『The Story of Amulet お守り物語』の流れをくむタイム・ファンタジーである。

(高桑啓介)

ルイバコフ アナトリー・H Анагорий Намович

Рысаков 一九二一— ソビエトの作家。革命と内戦と世界大戦を挟む激動の時代の生き証人。最初の『ピオネール少年団結成の体験を生かして書いた処女作』『Копилка 短剣』(一九四八)とその続編『Бронзовая птица 青銅の鳥』(五六)、一九六〇年代の少年の大人への成長を描いた三部作『おとなへの第一歩』(六〇)、『根つけ奇譚』(六四)、『Неизвестный солдат 無名戦士』(七〇)などの子ども向けの作品は、明るいユーモアにあふれ、今日も広く愛読されている。

(中込光子)

ルイフリツキ スビグニェフ Zbigniew Rychlicki

一九二一— ポーランドのグラフィックアーティスト

ト。児童図書出版社ナーシヤクシエンガルニアの副社長。民話集『Kiechdy domowe ポーランド伝説集』(一九六〇)など木版のイラストの評価が高いが、『ミィシヤのぼうけん』(六〇)ヤンチャルスキ作)が子どもたちの圧倒的支持を受けている。国内外の受賞多く、一九七三年BIB世界絵本原画展金賞、八二年国際アンデルセン賞画家賞を受賞した。

(内田莉莎子)

羅 英^{イン} 一九二六— 中国の児童劇作家、演出

家。河北省の農村に生まれ、日本軍の侵略に遭い、少女時代に中国共産党の軍隊八路军に参加、宣伝隊員となった。その後、各地の抗日戦線の演劇隊で活躍、華北軍区抗敵劇団の俳優、劇作家として活動。解放後は、中央戯劇学院で学び、五六年から北京の中国児童芸術劇院に参加、劇作、演出を担当、『飛向星星世界』(一九五八)、『革命的な一家』(五九)、『水晶洞』(六四)、『売火柴的少女孩』(七九)、『奇怪的一〇一』(七九)などの同劇団上演作品を主として共同創作で発表し、その多くの演出にも当たる。八〇年から中国政府文化部の児童青少年文化局長に就任、広く中国の児童青少年文化の指導者の地位にある。

(富田博之)

ル・グウィン アーシュラ・K Arslula K. Le Guin

一九二九— アメリカの作家。文化人類学者のアルフレッド・クローバーを父に、作家のシオドーラ・クローバーを母に、カリフォルニア州バークレーに生まれ、

コロンビア大学を卒業。一九六六年『ロカノンの世界』でSF作家としてデビューしたが、六八年から七二年にかけては『ゲド戦記』三部作『影との戦い』、『こわれた腕環』、『さいはての島へ』を発表。C・S・ルイスやトールキンの作品と並ぶ優れて本格的なファンタジーとして高く評価された。SF作家としての活躍も目覚ましく、『闇の左手』(一九六九)や近くはSF歴史小説ともいえる『マラフレナ』(七九)などがあり、多くのファンをもつが、フェミニストとしての発言も光っており、優れた思想家と呼んでいい作家である。そのエッセイ集『夜の言葉』(七九)はこの作家の思想をひもどく重要な手がかりとなる一冊である。(清水真砂子)

魯

迅

ルソー

一八八一

一九三六

中国の作家、思想家。本名は周樹人、字は豫才。浙江省の官吏の家に生まれるが、家が没落し苦学する。一九〇二年官費留学生として来日、仙台医学専門学校に学ぶも、半ばで文学を志し東京に戻り、〇九年に帰国。文学革命期を迎え『狂人日記』(二九一八)を、『新青年』に発表する。これは人が人を食う社会で、まだ毒されていない子どもを救えと叫んだもので、中国近代文学の先駆となった作品である。その後、『孔乙己』(一九)、『故郷』(二

一)、『阿Q正伝』(二二一二)や、仙台時代を描いた『藤野先生』(二六)などの小説のほか、反動勢力との論戦の中で、鋭い社会批判や文芸批評を続々と著し、永眠す

るまでの歩みは文字通り中国近代文学の歩みでもあった。また生涯を通じ外国文学の翻訳に力を注ぎ、エロシエンコの童話『桃色の雲』やバンテレーエフの『金時計』など、彼が紹介した多くの作品は、中国の児童文学に啓蒙的な役割を果たした。(中島久美子)

ルソー

ジャン＝ジャック Jean-Jacques Rousseau

一七一二

一七七八

フランスの思想家、文学者。スイスのジュネーブで生まれ、一三歳の時に徒弟奉公に出され、以来、召し使い、神学生などいろいろな職業を転々としながら放浪。ヴァラン夫人に巡り合っ

てその保護を受けるようになり、二三歳の時から勉強をした。やがてパリに出て、デイドロなど百科全書派の文人たちと交わり、『学問芸術論』(一七五〇)で教会を厳しく批判し、一躍思想界の惑星的存在となった。『人間不平等起源論』(五三)では、人間が自然児として平等で自由であるという信念から同時代社会を激しく批判した。ドゥードト夫人に対する失恋の痛手から書いた書簡体小説『新エロイズ』(六二)は貴族の娘と平民の青年との哀切な恋を描いて、フランスに当代イギリス風の近代小説を導入した。ルソーの思想の頂点は『社会契約論』(六二)で、人間の自由、平等、主権在民の民主主義の大原則を率直に提出し、アメリカの独立、フランス革命の原動力となった。また、『エミール』(六二)は、小説の形を借りた近代教育学だが、児童に読ませ

るべき本として、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』をあげ、自然に則した、子どもの自由に任せる教育法を打ち出した。

(榊原晃三)

ルツクホーケ ジナ Gina Ruck-Pauguet 一九三〇— 西ドイツの児童文学作家。一九五九年に出版された第一作『おぼけはケーキをたべない』以来、六〇作以上もの児童文学作品を発表している。動物が主要な役を演じる幼年向きの読み物から『Joschko ヨシユコ』(一九六三)など、現代の若者のもつ諸問題を考えさせる青少年向きの小説まで、厚い読者層をもつ。国際アンデルセン賞のオナーリストをはじめ、数々の内外の賞を得ている。

(佐藤真理子)

ルツヘルス ファン デル ルフ アン An Rutgers van der Loeff 一九一〇— オランダの女流児童文学作家。母親が若い時からスウェーデンに住み、スカンジナビア諸国の本の翻訳をしていた時、娘であるこの作家もその手伝いをしていた。母と娘の共著『Het oude huis en wij 古い家と私達』(一九四〇)を書いた後、この作家は作家活動に入った。その後、『De kinderen van van子どもキャラバン』(四九)、『Amerika, Promiers en hun Kleinzoons アメリカ、開拓者とその孫たち』(五一)、『Gideons reizen ヒデオンの旅』(六〇)などの作品を発表している。そのほか、日本語に訳されているものに、次のような作品がある。『みんなの

広場』(六二)。これは町の中にある遊び場をめぐり、子どもたちの間に争いが起こっていたが、大人たちが土地を取りあげようとしたことから、子どもたちが一致してそれに立ち向かうという物語。また『われらの村がしずむ』(五七)は、電力開発で村が湖底に沈められていく中で、バスカン家の人々を中心に展開していく物語。ほかに、サスペンスタッチの公害を扱った『風車小屋の足あと』(六七)がある。

(熊倉美康)

ルナール ジュール Jules Renard 一八六四—一九一〇 フランスの小説家、劇作家。中部フランスの農村シトリーに村長の息子として生まれる。パリのシャルルマーニュ学校卒と同時に文筆生活をはじめ。一八八九年、文芸雑誌「メルキュール・ド・フランス」の創刊に参加したことにより同誌に短・長編小説を発表し注目された。九四年に『ぶどう畑のぶどう作り』『にんじん』を、九六年に『博物誌』を発表し作家としての地位を確立した。その後劇作にも才能を示し自作の『にんじん』を戯曲化しパリのアントワーヌ座で上演され大成功を収めた。九六年からは、郷里シトリーの隣村シヨモに住み農村問題に取り組む。一九〇四年には、シトリー村の村長に選出された。そのころから社会主義に傾斜し、当時の統一社会党の機関誌「ユマニテ」にも寄稿した。『にんじん』は、髪の毛が赤いことから「にんじん」とあだ名された少年を主人公とす

る短編連作で母親に冷酷に扱われる少年の心の動きを描いた異色作。

(塚原亮二)

ルブラン モーリス Maurice Leblanc 一八六四—一九四一 フランスの作家。ルーアン市に生まれ、生

家はもともとイタリア系の移民で、織物業、回船業を営んでいた。少年時代から詩や短編小説を書いたが、青年時代に法律の勉強を口実にパリに出、新聞や雑誌に小説を寄稿するようになった。四〇歳までに自然主義風の風俗小説を多数書いたが、ほとんど評価を受けなかった。一九〇四年、友人ラフィットの編集する絵入り雑誌「ジュ・セ・トゥ」に「とびきりおもしろい冒険小説を…」という求めに応じて、『アルセーヌ・ルパンの逮捕』を発表。これは大評判となり、ルパンの活躍する作品を次々に書かざるをえなくなった。こうして生まれた『獄中のルパン』『ルパンの脱獄』『謎の旅行者』(以上一九〇七)などの諸作は、たちまち全世界の読者を熱狂させ、ルパンはドイルのホームズと並んで探偵冒険小説における神話的な大英雄となった。ルパン・シリーズの初期の傑作は『怪盗ルパン』(〇七)、『ルパン対ホームズ』(〇八)、『ルパンの告白』(二三)などの短編集に収められているが、シリーズ中の最高傑作といわれる『奇巖城』(〇九)、『三十棺桶島』(一七)、『虎の牙』(一〇)など、フランスの歴史、伝説、同時代の社会状況に取材した、スケールの大きい長編も書いた。

た。ルパン・シリーズは全部で二三編。これは作者が七六歳で亡くなるまで息つく暇なく書き継がれた。ルパンを創造した功績によりレジオン・ドヌール勲章を授けられた。

(榊原晃三)

ルーペ 少年少女雑誌。一九三九年(昭14)九月—四一年(昭16)四月。ルーペ社。石川光男編集。四〇年、内務省の左翼的出版物に対する弾圧、新聞や雑誌の整理・統合など出版統制強化の中で、「五年生の教室」、さらに「生活教室」と改題。小川未明、坪田譲治、奈街三郎、長谷健らが執筆。下畑卓、大河原三郎右エ門(一九四〇、のち『煉瓦の煙突』と改題)や、中野重治『お祖母さんの村』(四一)などに代表される、いわゆる生活童話が発表され、戦時統制期にあつて注目された。

(根本正義)

ルポルタージュ reportage ノンフィクションの一分野である実地報告のこと。児童向きでは探検記、冒険記、発掘記、体験記、旅行記などがある。国際的には、ハント『エヴェレストをめざして』やエルゾグ『アンナプルナ登頂』は極限状況での人間のすばらしさを描く体験記であり、A・T・ホワイト『埋もれた世界』やバウマン『大昔の狩人の洞穴』はともに考古学の発掘発見を伝えて感動的である。我が国でこの分野で評価される作品が出るようになったのは、ごく最近である。井尻正二『新版野尻湖のゾウ』(一九七六)は

数次にわたる集団発掘の状況を着実に記録してあり、たかしよいちはこの分野の優れた書き手で、『太陽と黄金とジャングル』（八二）は南米の古代オルメカ文明の謎を追う興味深い旅行記である。太平洋戦争中のでき事を書いた記録も少なくないが、高木敏子『ガラスのうさぎ』（七七）は空襲下を生きた少女時代をリアルに描いた体験記であり、大城立裕『対馬丸』（八二）は撃沈された沖繩学童集団疎開の悲劇の報告である。吉田ルイ子『ぼくの肌は黒い』（七八）はカメラマンの目で見たアメリカでの黒人差別の実態を鋭く捉えた報告であり、小池喜孝『北海道の夜明け』（八二）は明治政府による囚人労働使役の実態を探り出した記録である。これらはヒューマニズムに立って現代を捉え直し、社会の在り方や人間の生き方に鋭く迫るとともに、諸事実の背後に潜む真実を探り出す謎解きの面白さをもっている。最も可能性のある現代的な文学分野である。

（勝尾金弥）

レ

レアンター リチャルト Richard Leander 一八三〇

〇一八九九 ドイツの外科医、作家、詩人。本名リチャルト・フォン・フォルクマン。普仏戦争（一八七〇一七二）に軍医総監として従軍、パリを包囲中に童話を書いては、故国の子どもたちに送った。それを帰国後まとめて、レアンターの筆名で発表したのが、今日まで読み継がれる『ふしぎなオルガン』（七二）である。収録される民話風の小品はいずれもファンタスティックで心奪むものである。

（若林ひとみ）

レイ H・A Hans Augusto Rey 一八九八一八九七

七 アメリカの絵本作家。ドイツ生まれだが、ブラジルで長く貿易業に従事したのち、同じくドイツ出身で絵や写真の仕事をしていた夫人マーガレットとともに、フランスで創作活動をはじめ、一九四〇年アメリカに移住した。広く人気を博している『ひとまねごさる』のシリーズは、『ひとまねごさるときいろいろいぼうし』（二